昭和八年十二月の文科廃止反対ストライキに関する座談会記録

企画の理由と解説

昭和八年十二月初旬、学生のハンガーストライキという、本学史上珍しい事件が勃発した。その起因は、理事会が、法文学部文学科が、入学生少く、財政上欠損になるという理由で、文学科を廃止しようとし、学生がこれに反対したことにはじまる。

昭和三年四月、本学は新たに英文学科、哲学科を開設し、両科を合せて文学科と名づけ、従前の法学部に併せて、法文学部を設置した（注：専門部文学科の設置は大正十三年四月）。本学当局は、英、哲両科を合せて百五十名内外の学生を見込んでいたが、次表のように、昭和六年度の第一回卒業生（昭和三年度入学生）二十二名を最多として、志願者（卒業生）は次第に減少し、昭和六年頃には在籍者四、五十名、志望者四、五名というありさまであった。

昭和六年十月二十四日の理事会では、経営上の見地から、教授会の反対を一蹴して、昭和七年度より文科開講を見合せ、現在の在学生の卒業を待って、これを廃止することを決定した。これに対して文科学生および文科先輩団は反対の声をあげ、いろいろな運動で、各方面に働きかけ、十一月二十一日の予科、学部合同の学生大会で文科廃止反対を決議した。教授会も、すべての在学生の卒業する昭和十年まで講義を続けるべきであると主張し、十二月初旬の理事会では、この教授会の主張が承認され、従って反対運動も、まもなく鎮静した。

ところが昭和八年春にいたって文科在学生は、ますます減少し、英文科十名、哲学科二十五名、計三十五名にすぎず、大学当局は年約二千円の赤字を出したので、大学当局は、先年の決定に基づき、

第一表　（旧制学部）

法文学部　哲　学専攻科
　　英文学専攻科　卒業生数

回	卒業年	卒業生数		
		計	哲学	英文学
1	昭和6年	22	4	18
2	昭和7年	5	3	2
3	昭和8年	7	4	3
4	昭和9年	8	6	2
5	昭和10年	8	7	1
6	昭和11年	10	8	2
7	昭和12年	8	7	1
8	昭和13年	8	3	5
9	昭和14年	6	6	—
10	昭和15年	1	1	—
11	昭和16年	4	3	1
12	昭和16年12月	3	2	1
13	昭和17年9月	6	1	5
14	昭和18年9月	7	5	2
15	昭和19年9月	10	6	4
	合　計	113	66	47

注．昭和20年以降は省略

「昭和十年以降は大学部文学科、英文、哲学は開講せざることあるべし」という掲示を行った。

ここにおいて一旦鎮静していた反対運動が再燃した。八年初夏には哲学科一、二年生が中心となって、十数回にわたり理事を戸別訪問して文科存続を訴え、十一月三十日の理事会に文科志望の予科学生および専門部学生が校友支持の下に文科存続の歎願書を提出した。理事会は、もし文科入学の希望者が多ければ、昭和十年以後も継続するかもしれないと回答した。学生とくに哲学科生はこれに満足できず、哲学科一、二年生十三名が、十二月一日文科廃止反対を宣言英文科教室に入ってハンガーストライキに突入した。

十二月四日の学生大会は、文科休講・廃止反対を決議するとともにハンスト即時解除を決議した。そして釘付された教室を破って四日間の絶食で衰弱した学生を堂島回生病院に収容した。五日には学生大会に引つづき、五百余名の予科生が威徳館に留まり、籠城を始めたが、仁保学長、村上予科長は、「全責任をもって学生の主張貫徹に努力する。七日まで一切を任してほしい」と声涙下る訓示をしたので、学生は午後七時散会した。七日の協議会は文科存続を決議、教授会も賛成した。

八日に学長は威徳館に一千の学生を集め、文学科の講義は休廃せず、昭和十年以降も引続き開講すると声明し事件は落着した。

以上は事件の概要であるが、事件の詳細について不明なことが多いので、ハンストに関係した当事者、当時の文科学生であった諸氏を招き、三時間にわたり座談会を行って、事情を聴取した。以下の記録は、その抜萃である。

附言すると、昭和四年十月にニューヨークのウォール街で起った株価の大暴落に始まる世界的大不況は昭和六年から八年頃に深刻をきわめ、日本でも失業者は激増し、大学卒業生も、卒業時に就職し得たものは、少数で、とくに文学部系はひどいありさまであった。文学部志願者の減少の背景として考えるべき条件である。

なお第二表は主要私立大学の文学部（科）設置年代であるが、私

第二表　関東・関西各私立大学文学部（文科）設置年月

慶応	明治23・1 大正9・4	文学科発足 文学部となる	安政5創立	大正9・2昇格
早稲田	明治23・9 大正9・3	文学科開設 文学部と改称	明治15創立	大正9・2昇格
明治	明治39・9 昭和7・4 昭和24・2	文学部授業開始 文科専門部を置く 文学部を置く	明治14創立	大正9・4昇格
立教	明治40・8 大正8・8	文科を置く 文学部と改称	明治7創立	大正11・5昇格
同志社	明治45・4 大正8・1	英文科開講 英文科を文学部と改称	明治8創立	大正9・4昇格
関学	明治45・4 昭和9・4	文科開講（高等学部） 法文学部開設	明治22創立	昭和7・3昇格
法政	大正9・3	法文学部を置く	明治13創立	大正9・4昇格
日本	大正9・3	法文学部を置く	明治22創立	大正9・4昇格
関西	大正13・4 昭和3・4	文科を設置（専門部） 法文学部文学科開講（大学部）	明治19創立	大正11・6昇格
立命館	昭和2・3 昭和15・7	文学科を置く（専門部） 文学部設置を議決	明治33創立	大正11・6昇格
中央	昭和26・4	文学部開設	明治18創立	大正9・4昇格
専修	昭和41・4	文学部開設	明治13創立	大正11・5昇格

大がいかに文科設置について、躊躇し、設置の歩みが遅々としていたかがわかる。結局、私大の文学部を設置するには、当時の日本の国力や経済状況では、社会的条件が不充分だったようである。そこにハンストのような悲劇的事件を勃発せしめる背景があったといえる。

座談会記録

日　時　昭和五十年八月十九日

出席者（敬称略）

昭和九年　法文学部哲学専攻科卒　竹内義一　野間秀泉

昭和九年　法文学部英文学専攻科卒　榎本金次郎

昭和十年　法文学部哲学専攻科卒　西田亮哉

昭和十一年　法文学部哲学専攻科卒　奥野芳三郎　是恒高保

関西大学文学部教授　横田健一

同　第一高等学校教諭　塚口義信

同　年史資料編集室　旦　菊男

同　年史資料編集室　係　員

昭和六年十月の理事会の文科廃止言明について

横田　まづ昭和八年十一月にスト事件が始まったわけですが、その前に昭和六年十月に理事会が文科廃止を言い出しております。それについて、ご記憶がありましたら。

奥野　私は昭和五年に予科に入って、哲学科へいったんですが、入試口答試問は貨幣論の正井（敬次）先生に受けました。六年に問題が起った折には予科が学生大会を開いたりしてやった……。私は山岳部に居て、勉強せずに山ばかり行っていたんで（学生大会のことを）知らなかった。その折に梅田のある喫茶店に行くと、山岳部の連中が四、五人と、学部の人も四、五人いた。山岳部で哲学科の森田（米造）がいた。

榎本　顎が張っている人。よく憶えている。

奥野　喫茶店にいた連中が、私がゆくとスパイが来たと思ったのか、慌てて皆出て行った。その中に、野村―文学部廃止事件の折、相当やった人物、神戸の人―がいた。その山岳部に居た野村が予科をまとめる中心人物の一人で、後で停学を喰らうかと心配しておった。

横田　それは何年の何月ごろですか。

奥野　昭和六年の六月です。

奥野　野村が関大の新聞に「帝国新論」を書いた。予科二年でした。大学を出てから転換して兵庫県で警察官になりました……法科でした……。

横田　学部学生は昭和六年に何かしましたか。

榎本　人数が非常に少なかったので何もなかった……。

（西田亮哉氏出席）

予科学生大会について

榎本　いつの場合でも、予科生を動かさないとダメなんです。私も予科生を動かすために相当苦労したんです。

横田　昭和六年十一月に理事会が、「昭和七年度より第一学年の講義を開かざることあるべし」と発表、学生は当局に歎願したり、学生大会を開くなど、文科存続運動を起したが、その後、静まっていたそうですが……。

奥野　予科の学生大会についての記憶があります。学生監に陸軍大佐の矢島（彪）さん、学生監補兼予科の生徒監に陸軍大尉の竹腰（吉治）さんがいた。山岳部に阿部正貫という学生がいた……。

榎本　阿部は私より一年上。

奥野　阿部正貫が、私が予科の時哲学科志望というので、「自重するように」という矢島先生からか、竹腰先生からかの言葉を伝えたことを聞いています。……僕が予科二年の時、応援団の副団長していましたから、一緒に暴れへんかと思われたのかもしれません。

横田　あなたが副団長当時の団長はどなた……。

奥野　予科三年の弁論部の……。

榎本　高橋君や。ダルマ……背の小さい。

奥野　僕が予科二年の折に、予科三年は野村か何かいう背の高い男やった……。

榎本　そんなら高橋君の次や……。

奥野　その団長が阿部正貫―山岳部のボス―を通じて、御指名で私が副団長になった。予科の生徒大会で、団長が予科二年の奥野を副団長にするといえば、手をたたいて終りだった……。

横田　その時の応援団長はどなたですか。……吉田三七雄さんではありませんか……。

奥野　アラメダという実業野球団と寝屋川でやって勝った。その時、西村という阪神へいった……あれが投手だった。その時、私が副団長で団長と一緒に行った。

理事、先輩を個別訪問

横田　昭和六年のことは、これくらいにして昭和八年のことをおうかがいします。文科廃止をきめた八年十一月三十日に天六学舎で開かれた理事会の前に、すでに早くから、予科、文科の学生が、十数回にわたって、各理事を個別に訪問したそうですが……。

奥野　私らやりました。

是恒　私は、みんなにたのまれて、要望書か嘆願書みたいなものを持って、東京の前学長松本烝治さんを訪ねたことがありました。……存続に努力してくれということで……。

昭和八年四月からの運動と中心人物

奥野　昭和八年四月に、是恒君や私や皆が哲学科へ入った折、もう四月から用意したんですワ。入るなり……。先生方の中心人物、連絡員が、菅（守常）さんでした。

是恒　そうでした。

奥野　菅さんが中心でした。四月からやって、夏休がすんでから本格的に用意したんです。まず第一に、私より一年下の予科の応援団長橋本（利夫）君、今、吹田市になっている豊津の横の金田町（かねだちょう）の橋本君の家に行くと、お母さんが「今、留守です」という。

奥野　おかしいな、と思ったら、学校が始まると、彼が神兵隊事件

で警護されとったんですワ。

旦　神兵隊事件は七月です。（註、七月十一日計画発覚）

奥野　八月かに行ったら、橋本君の家は地主ですが、座敷にお母さんが一人坐っていて「今留守です」とおっしゃいますねん。「おかしいな」と思って帰つて…　夏休が終って九月に入って二学期を迎えた折、応援団長が替った。……それで、応援団を動かさなアカンと……。

是恒　片岡（恒次郎）と逢ったのが、心斎橋の喜久屋です。

奥野　学生はよく喜久屋というスキヤキ屋を使った。片岡君と副団長何とかいった……。

是恒　金馬とか何とかいって。

奥野　その折の応援団長は片岡君やないですわ。その兄貴が私と同期で予科三年から九大へ行ったんです。弟も……。岡山の人で弟も九大へ入ったんです。兄貴も応援団長しよった……。

応援団を動かしたことが成功の因

是恒　たしか応援団長を動かしたことが、ストライキを成功さした大きな原因だということは、誰もわかっていたけれど……。

奥野　それで応援団長、応援団に一応、喜久屋へ来てもらって、是恒さんや皆、連絡の学生が行って哲学科では僕ら……、英文科の一年は広瀬（捨三）君―前学長―一人でしたから、あれはもう……。

是恒　英文科一年は、もう一人いた。

奥野　木村（清司）か……。

是恒　二人でしょう。

奥野　それでもう二人を除外してね。

榎本　全然関係してない。

奥野　それで、それを除外して、哲学科と応援団とで、手打式をやったんですよ。「よろしく頼む」と。

是恒　そうか。……思い出すナ……。

榎本　その通り。

奥野　とにかく、学校外から攻めなイカンと考えて、卒業生とか、理事とかへ、一応廻ったわけです。私は岡山へ、高橋（五郎）と一緒に行きました。それから九州へ行きました。是恒君、あんた東京へ……。

是恒　東京へ行った。

奥野　そして理事会へ向って、そちらの方から、まづ圧力をかけてもらおうと考えた……。

是恒　僕は松本烝治さんを訪ねて、存続に努力してくれと、学生の熱意を伝えてくれとか、前学長として……あの時、司法大臣やってた？

奥野　イヤ司法大臣はあと……。

是恒　商工大臣？

奥野　そや商工大臣や……（註、松本が商工大臣になるのは、昭和九年二月のこと。八年秋には、中島久万吉であった。）

是恒　松本さんにいろいろ事情をのべて、まあ、プラスの返事。出来るだけのことはしてあげようという。……それを帰って報告した……。

塚口　それは、いつごろのことですか。

是恒　十月ごろ。

移動本部の設定

奥野　九月の月見に、淡路の……淀川の川岸に大橋（宥量）君なんかの何で……尼寺があった。そのお寺で皆冷酒をのんで、いよいよやろうというたのが月見の晩や。月見を兼ねて集まったんや。それが淀川べりへ行ったわけ。皆一緒にネ。

是恒　そうそう。

奥野　それからあとで豊津の、イヤ豊崎か？　天六の豊崎のお寺を借りたネ。

是恒　ああ、そうそう。

奥野　お寺を借りて、そこで団結を強くするため、交替に合宿したナ。

是恒　移動本部と言った言葉が、……珍らしいのでネ。

奥野　豊崎。天六の。工場地帯の中の小さな寺を借りて、そして外から先づやろうと、是恒君が東京へ、私と高橋が岡山へ行きまして、先輩の……裁判官の官舎へ行ったんですワ。わしは裁判官で、どうも出来んと言うて、岡山の弁護士を紹介してもらってネ。その人に尽力を願ったんです。それから、やっぱり弁護士でしたネ。福岡へ行きました……。

横田　岡山の方は神崎伝次郎さんではありませんか。

奥野　私が二十一か二で、岡山の方は四十五、六になっていらっしゃるように思いました。

奥野　二へん目に訪ねて行く折にネ。「お前千里山の写真をもってきて見せてくれ」言わはって、二へん目に行った折に持って行ったら、「こんな学校か、一ぺん大阪へ行きたいナ」とおっしゃったのを記憶しています。

是恒　その時に、移動本部って言葉が当時、非常に珍らしくて、危険な言葉で、皆は我々がトンでもない奴だという印象を受けておったんでしょうネ、我々が移動本部を形成して、奥野君が連絡係で走り廻っていたので……皆が僕らを追究して後をつけていたわけではないでしょうけど、……我々は次々に違ったところで会合をひらいてやっているでしょう。

横田　左翼の運動とまちがえられたわけですネ。

奥野　それがネ。昭和八年の一学期に、灰井正二が、予科におったんです。それと山口というのがいた。どちらも左翼なんです。灰井君は非常にマセていて、自分で、北野中学にいた折から『第二貧乏物語』（河上肇著）を読んでいたというんです。灰井君と山口が、山岳部の私の下級生を通じて、一学期の終りごろ、私の家へ私に逢いに来ております。

昭和五年の学連事件では関大からも検挙者が出ていますから、私は、これに巻きこまれたらアカンとすぐ切りました。二学期に入りましてから、応援団の連中が、何かのことで山口をたたいたんですワ。灰井は逃げたらしいです。山口は私に一切手を引くと言いました。これは非常によう勉強しとったらしいですネ……。大体、中心人物は、今から思うと高橋五郎なんですワ、哲学科一年におった。昭和五年に一ぺん法科を卒業して、彼のいうところでは、当時、北浜で百万位株でもうけたんです。そして、またたく間にスッたんです。それで発心して、三年すんで、昭和八年に哲学科一年に、また入って来たんです。

学生の中心人物、高橋五郎

榎本　高橋君が中心です。

奥野　自分らが中心やと思っていたけれど、実際は、高橋君におどらされとったんですネ。

榎本　あなたが先ほどおっしゃった菅先生が、―本当は伏せとこかと思ったが―中心です。

奥野　そうです。本当は……。

是恒　それは、わかりますね。

榎本　補足で言いますけれど、僕も、学生を動かすために、最後に頼まれたのは菅さんです。あんた達が部屋に入ってハンストをやっても、一般学生は少しも動かないんだ。知らん顔をしとんのだ……。

奥野　ちょっと待って下さい。そこへ行くまで、ハンストをやろうと、理事会をズッと攻めて来たわけです。理事にネ。増田さんという人がいた……。

是恒　増山。

奥野　増山忠次か。この人は土佐セメント―今、日本セメントに合併された―の専務か副社長……。

是恒　専務。

奥野　増山さんと菅さんとが、どういう因縁か……合ったわけです。

榎本　それでは言おう。北浜二丁目の吉田音松弁護士（註、当時理事）の家―三越のちょっと北で、細い露地を入ったつきあたりに事務所があった―に、音松さんに逢いにいった。「文科廃止になってケシカランじゃないか。大学というところは営利的であってはいけない。だから文科を続けてくれ」と……吉田氏曰く「君等は青年の理想を描いているんで、現実に二千円も三千円も年に損害が出ているのに、青二才の学生が言うようなことはできん」と言下にはねられた。はっきりと……。

奥野さんの言われたことを、一寸補足しますと、菅さんが中心だったけれど、その次に中心だったのが堀（正人）さんです。

先生の間の中心人物

奥野　そうです。

榎本　堀さんは、増山さんの紹介で関大へ来られた。……菅さんと堀さんとが仲が良かったから菅さんを増山さんに、堀さんが紹介したわけです。

奥野　それで増山さんに堂ビル八階の清交社へよく逢いにいった。（是恒氏に）あんたも行ったな。学長の仁保さんが栃植から大阪へ出ていらっしゃったら、堂ビルホテルに…とまって…おられた。そこで応援団を引きしめて、連絡をとっておいて、予科も一、二、三年の別もなく十把一からげで応援団を召集して、文科廃止反対の決議をとってしまった。

榎本　そこへ行くまでにネ。一般学生が今日と同じで無関心で、ハンストやっても少しも動こうとしない。そこで私は堀さんと菅さんとに頼まれた。それで私の同期で、今は千原と名が変った和気清治―柔道の猛者。

奥野　明石から来とった人。柔道部……。

榎本　いや、岡山県人です。僕と予科から一緒。菅さんと堀さんから、「一般学生をナントカするよう、予科学生大会を開かすよう

にやってくれ」と僕が頼まれた。そこで花壇のガーデンという喫茶店に和気以下運動部、応援団の猛者を三十人ばかり集めました。そこへ菅さんと堀さんと僕とが出ました。私はこう言いました。

「哲学科の一年の学生がハンストをやって一生懸命やっているのに、君達無関心でいるとはケシカランじゃないか。人道上の問題だから、君達の手で、学生大会を予科で開くようにしてくれ」と。二、三時間かかりましたが、和気君を説得しまして、堀さんも、そばにおられて「榎本君うまいこと言うな」とおほめの言葉を…、それで「そんなら開かそう」と予科の学生大会を開かして、「哲学科のハンストをやっている学生さんは、もう僕等にまかせ」と…それで「お前達は、もう出てこいとこう言わせてくれ」というようにもって行きました。

奥野　それマア、今日始めてききますわ。そうでしたか。

是恒　私は専らストライキの（部屋の）内部にいたので、外の動きが（わからなかった）…その前に外の動きができる基盤として、応援団長と副団長を喜久屋に呼んで「よろしく頼む」といって、僕ら手打式をやった。

奥野　榎本先生のおっしゃるのは、その後なんです。ストライキに入ってからの事です。私たちは、その前に準備工作をしたわけです。

予科生を動かすための準備工作

奥野　そこへ行くまでに新聞部を動かさないかんわけで、新聞部へいって、号外出すことをねらった。学部では、一年、二年、三年別々に大きな嘆願書を作って、東京、岡山、九州へ行って卒業生の署名をもらうと同時に、予科から学部まで署名をとった。ハンストということは、私たち、是恒君も考えていなかった。ハンストをやると言ったのは高橋五郎君と久野君ですワ。築港高野山におった竹本（寛隆）君が総帥になったんかナ？　ハンストやる、言い出したんです。それでハンストのメンバーをきめた。ハンストに入ったのは全学生を動かそうということで、そのチャンスをつかもうとして、入ったわけですね。

榎本　そうですネ。

是恒　入っても、しかし、なおかつ、動かなかった。予科の連中が学生大会を開いたのは何時ですか。私にはハッキリした記憶が一つあるんです。私が何日目かに飯食わないでフラフラになっているのを、予科の学生が部屋の中から、外へ連れ出したのですよ。

奥野　そうそう。

是恒　両手で僕を肩にかついでいってネ。学生大会の演壇の上で一言しゃべれってんでネ。僕は大分へばっていたけれど「実はこういうわけでハンストをやっているので、よろしく頼む」ということを…そしたら誰か応援団のか、誰かが、「そうだそうだ、文科どころじゃねえ、工学部も理学部も置いてもらいたいんだ」という演説をやってくれてネ。僕は感激してネ。そのまま誰かに、こう連れられて肩によらしてもらって、裸足のまま歩いて……。

榎本　僕は、あなたの姿を憶えている。僕は反対に、ハンストの部屋の中の様子を知らないんで、奥野さんなんかに……。

是恒　奥野さんは内外の連絡係をつとめて……。

奥野　ハンスト私はやってない。たしか高橋君が中心やな。西田（亮哉）さんも。…外から攻めるのに新聞を利用せなアカンとい

うことになった。

是恒　そうそう。あれは奥野君の大功績でしたな。

新聞社との連絡

奥野　わたし運動部にいましたから、当時、中学（高校）野球でも朝日新聞にのったって、毎日にのらんという時代です。それにたまたま昭和五年に関大法科を出て時事新聞におった後藤（延治）さんを通じて朝日へ連絡がついたのか、私の一年上の三宅さんが朝日に入っておられたということもあって……。その三宅さんか、どっちかの連絡でネ、朝日の社会部の記者で社会運動の担当をしている十河巌（頭の毛がスターリンみたいな）によその新聞へ出さんから頼むということで連絡がとれた。ストに入ってから後藤さんと高橋君が昭和五年の同期だとわかった。それで「オイ高橋」って隣の部屋から是恒君らのストやっているところへ、声をかけたん憶えてます……。

是恒　ウーン、新聞社がハンストの部屋に入ってきましたヨ。我々がハンストをやるに至った事情、決心した事情なんかをしきりに…ウンウン言いながら、こうやって見廻しているから、…こっちの言うことを、どこまで聞いてくれるかな、と思いながら、一生懸命訴えていたことを憶えています。

奥野　その（ハンスト）当時の財政（ストライキ資金）ですネ。山岳部長田辺信太郎先生から出とるんです。田辺先生は東京商大を出られて、関大の西欧経済史をもって、アシュレイの本ね…。

榎本　金持なんです。

奥野　お父さんが大きい材木か何かの問屋さんで……。

榎本　そうです。

奥野　そこで大体資金調達したんです。ストに入ってから一ペンだけ、吹田警察が、晩に私に逢いにきました。「西田いう学生の思想傾向はどうだ」ちゆうことで…それは（西田氏に向って）あなたがおっしゃった「わしマークしてきよるで」と…なんでいうとエスペラントやってはったんですよ。

横田　そのころエスペラントはにらまれていた。左翼の一つのシンボル。

収拾役の人々

奥野　収拾つける折、一番お世話になったのは、向軍治（註、ドイツ語の講師）先生ですわ。向さんが学生大会、最後の学生大会を牛耳ってくれた…。采配をうまくとってくれたのは、私らが大学一年の折に二年の小林（弁論部）がうまくまとめてくれたわけです。

私、母親から聞いた話で、是恒君のお父さんを非常にほめていました。仁保（学長）さんが、父兄を呼んだわけです。「親の説得を聞かんから、学長さん、あんた行ってくれ」というたら、仁保先生が「わし行ったらたたかれるか殺されるから、よう行かん」いうたら、是恒君のお父さんが、「あんた、教育者で殺されたって、たたかれたって、覚悟の上で、学長してんのと違うのですか」と詰めよったということを聞いています。最後の収拾は、ドイツ語の向先生が、学生大会へ出てきて、「学校を引っこますから」と最後をつけて下さった。

西田　私の記憶では、二階（ハンストの部屋）からものを…下に居

って二階に水を上げたり…岩崎（卯一）先生が激励みたいなことをおっしゃっていました。私みたいに他の学校から来たものが主になってやっていると、予科から上がったものは、よくやってくれました。

奥野　それから（ハンストで弱った学生が）なぜ回生病院へいったか、というと、私の聞いているのでは、松本烝治さんと回生病院と何か関係があった。…学校側が、どうしても、病院へ入院ささんと、かっこうがつかんのですワ。

榎本　そうそう、そうです。僕と菅先生が相談して堂島の回生病院へ…是恒君を見舞にいったのです。

ハンストの発端は十一月三十日、天六学舎で

是恒　ああそうですね。見舞にきて下さった。僕は送って頂いた七十年史や当時の新聞のプリントを、一寸目を通したんですが、あのストライキのはじめの状況が、正確に出ておりません。ストライキのはじめから、千里山でやったんじゃないんです。三十日の夜は、天六でやったんです。

奥野　そうです。

是恒　理事会に交渉に行ったのかな。

奥野　そうや、理事会に行ってはねられたんや。

是恒　はねられて、そのまま天六の校舎の門から入った右側の入口の、コンクリートの塀の傍で、皆坐っちゃったんですよ。それからズッと何も食わずにネ。あそこでストライキに入ったのです。

奥野　そうです。その折に学生監の矢島さんが「出て行け」言うた折にや、いま土佐にいる森。

是恒　森直行。

奥野　これがものすごい抵抗しよったんや。矢島さんに。矢島さんしかたないから…

是恒　（写真を見乍ら）ここの玄関のところのコンクリートの上でストライキはじめたんです。一階の玄関上がったところですね。翌朝一番電車で天六から千里山へ移ったんですよ…。

ハンストをやった教室と籠城者

榎本　英文科の何年の教室でしたかなあ。

奥野　とにかく畳があるから、あの部屋わかっている。

榎本　半分畳がある、奥の方に。

是恒　教室が半分になって、こちらにはふつうの椅子や机があって講義できるようになって、この辺、まん中から仕切ってここへ障子かなにか…。

奥野　たしかガラス障子が入って…。

是恒　その裏に、六畳ばかりの畳があって、そこでみんな…。

奥野　こっちがその図書館…の向側の部屋です。

榎本　向いのすみっこです。二階の角ですなあ…僕がパン投げに行ったのも、そこですから…天六で最初に坐りこまれた三十日の晩の人数は…。

是恒　十二、三人。

奥野　ストに入ったんか。入ったん十人位やで。ガンジーあれなんとかいう名前。

西田　酒井長英。

奥野　酒井君が一ぺん出よったんや。立命館の予科から来たんや。

…そうしたら、もう一ぺん入ったんや。

是恒　だけど次つぎに抜けて…畳の間の天井からか…正面から出るとストが破れたということがわかるから、畳の間の天井をはずして、天井から隣の部屋かどこかへズッといって…最後に扉を開けた時に四人しかいなかったので、新聞社がビックリして、…十人くらいいると新聞にズッと出ていたのに…四人…高橋と僕と西村と。

奥野　それから竹本（一道）やろう？

是恒　竹本？

奥野　大橋もおった…おったぞ。

是恒　なら竹本が出たのか、大橋が出たのか。

奥野　竹本は居ってん。大橋居よった。それからあんたやろ。

是恒　高橋出たんか。

奥野　高橋居った。

是恒　四人だったことを俺記憶している。

奥野　回生病院に入院したのは、七、八人でしたよ。

是恒　いや四人…四人それで西村（好道）が禅宗坊主だから、ハンストには、なれているんだよ。

奥野　西村も居った。しまいまで居った。

是恒　流動物でなきゃいけないと…酒をのんだ。酒のんだら先生が怒ってネ。…西村君は元気でしたか。

奥野　元気でしたネ。高橋君も元気でしたネ。

是恒　へばったのは僕とだれや。

奥野　あんただけや。

是恒　体弱ってたナ…。

奥野　本当に入院してなきゃならないような状況だったんは、あんただけや、ほかは皆元気やった。

是恒　誰かにかつがれて学長室と面会室（学部学舎）の角に小さい部屋がありましたネ。

奥野　六角堂。

是恒　あそこにつれて行かれて、長椅子の上に、こう寝たことは、チャンとおぼえています。それから、しばらくして回生病院へ運ばれて…。

西田　ストのはじめの方で是恒さんなんかと大分争ったことがありますネ。

是恒　ありましたよネ。これ（奥野氏）が僕をなぐったんだ。僕はハンスト反対しとったんだ。入るまで。……もっと、ほかの手段があると思って。そしたら「この野郎卑怯な、そんなハンストが恐いのか」って、奥野が、僕をネ、なぐったん。天六のあそこでなぐられたことを憶えとる。

奥野　ああそうか。

榎本　なぐったものは忘れるけれど、なぐられたものは忘れない。（笑）

文科存続決定の報とスト参加者の処罰

奥野　それから理事会が存続を決定したことは、その日（十二月七日）の晩に噂された。増山さんを通じて、菅さんに行ったんかな。菅さんが細原吉章―今、吉祥いう料理屋をやってますネ―に知らせてくれたんです。もう決ったで。学生大会で明日、仁保さんが言いよんで。前の晩にわかったんです。それで、その日の晩に回

生病院で一杯のんだんですよ。

榎本　僕らの帰ったあと。

奥野　それで向うの事務長にえらいこと怒られてね。

是恒　その時か。西村が流動物だといったの…。

奥野　細原さんが事務長のとこへ、あやまりに行ってくれた……。

奥野　あとで法文学部教授会から、全部参加者、一ト月の停学くらったんですワ。平等に。ドイツ語の向先生私の家に来ておられたんですワ。「けしからん、もう一ぺんやらないかん」いうて来てはるんです。それから、応援団の片岡君や皆が、もう一ぺん繰返そうと、スト、いや計画をぶり返そうという話が出た。挑発にくるんやからね。

是恒　あれも、ことわるのに随分苦労した。

奥野　それやったら、今度は足をすくわれるから、止めて置こうということになった。それには大分努力しました。…予科の片岡君や皆大分いきり立っていましたから。それを説得したわけです。

榎本　あのう、管長さん（註、野間秀泉氏）が、何か仁保亀松学長のところへ抗議に行かれた話があるいうて…。

野間　大分しらべたんだけど、四十二、三年前のことで日記が見あたりませんので…仁保亀松学長の御自宅（三重県柘植）へ行った記憶があるんです。二、三人で仁保亀松先生ところへ、極力考えて下さい、一つ存続するよう協力して、力になって下さいと抗議というか…行ったことを思い出します。誰かにたのまれて行ったんではないのです。いろいろ手わけをしてネ。

竹内　あの当時の三年生は、菅先生が殆どリードして、朝日新聞に話があったんですが、毎日新聞にも行きましたよ。私、毎日へ行きました。毎日にもハンストの記事がのっているはずです。細原吉章やらね。

仁保学長宅訪問

野間　あの君とたえず、私は行動共にしてましたわ。実際運動は二年級の人が主体になってやって下さった。我々一緒になってやってたら、もう卒業するんだという、一つの安易さがあったんでしょうネ。それで外部を廻ったんです。

学長のお宅は大きいうちでネ。三人で行きました。

竹内　それから三人、送別会のとき丸坊主になりまして、全部。

野間　そうそう、そういうことでした。

是恒　頭そったのは、三年生だけですか。

竹内　ええ三年生だけです。

奥野　僕ら頭刈ったやないか。

是恒　僕そったような記憶がないものだから。

奥野　いや刈ったかった。あのな、こうやってん。回生病院の中に散髪屋があって、そこで刈ってん。病院の食堂の横にネ。堂島川の方に散髪屋があってん。…一階の川べりにありました。

野間　そうそうありました。

（座談会記録以下略）

あとがき

終りに、この座談会の価値をのべておく。従来、このハンストについて、私が記述した『関西大学七十年史』においては、専ら、当

時の新聞によって、執筆した。しかし、その原因、経過や、参加者や背後関係者の氏名、その参加の仕方、また結末などに不明の点が多々あった。それが、この座談会によって、詳細に明らかにされた。これは、当事者の記憶になるだけに、実に貴重であった。ここに、当日の出席者各位に深謝の意を表したい。なおこの文章に誤りがあれば、それは、私の責任である。

関西大学文学部教授　横田健一